

◆たかはし・やすよ 山口県生まれ。フォトグラファー。食、農業、環境をテーマに活動。

幼稚園や保育園など地域の施設に太陽光発電を設置する活動を支援してきた。愛称は「おひさま発電所」、みんなでつくる市民共同発電所だ。阿部さんは設立時から会員で、現在は副理事長も務める。21年からは、同様に地球温暖化防止活動を進める府内4団体よびかけ「市民再エネプロジェクト in 京都」を結成、寄付集めや助成金獲得の支援を、同プロジェクトで行うようになった。祈念館への設置は府内で25基目になる。

なぜ祈念館におひさま発電所なのか。両方の活動に携わる阿部さんは「人権と環境、平和や教育は、全部根っこでつながっているから」と言う。例えば、化石燃料の使用で気候変動が進めば、最も深刻な被害を受けるのは弱い立場の人々だ。洪水や山火事は年々多発し、食料生産への影響で価格も高騰している。住まいや食を奪われる途上国や困窮者は増えており、気候危機は人権に直結する問題だ。一方、戦争は常にエネルギーや資源の奪い合いから始まり、その遂行にもエネルギーが欠かせない。真つ先に攻撃されるのはエネルギー関連施設だし、朝鮮の人たちが戦争中、働かされていたのも炭鉱や発電所だ。輸出停止など、しばしば武器としても使われる。「微々たることでも使う分は自分のところをつくる。そうすればよそから持つてくる必要はないでしょう?」と阿部さん。「置き去りにされた」人々の人権を考える場所だからこそ、自前のエネルギーへの思いは強い。エアコンだけは別系統だが、それを除けば祈念館では今、ほぼ100%、エネル



ウトロ平和祈念館に設置された「おひさま発電所」。この日は、韓国の大学の先生たちが視察に訪れた。



ウトロ平和祈念館。2025年10～11月に「ウトロ・アートフェスティバル2025」を開催、外壁にはウトロ地区の住民の暮らしを記録した掛絵、「咲け!タンポポ」がかかっている

ギーを自給できているという。グリーンファンドでは毎年参加者を募り、おひさま発電所をめぐる見学ツアーを実施する。「環境に関心を寄せる人がここに来てウトロの歴史を知る一方、人権問題で訪れる人が気候危機を学ぶ機会にもなり、多様な問題意識が広がっていきます」(阿部さん)

## 多様な人の出会う場

立ち上げ以来、グリーンファンドの事務局長を務める大西啓子さんは「原発って人権侵害せずに成立が可能な発電なのではなかろうか」という本質的な問いを投げかける。

放射性物質を扱う原発は、ウラン採掘現場から始まって、使用済み核燃料の処理、保管、廃炉に至るまで常に被ばくの恐れがある。大西さんがこの活動を始めたのも、誰かを傷つけながらつくられる電気では暮らしたくないという思いからだったという。

当初から遠い場所に巨大な発電所をつくる発想はなかった。「一番いいのは、自宅の屋根につけて使う分をつくること。物理的にできない人は寄付などで協力して地域の施設に設置して、災害時などにはみんなで使う。分散型電気を

地域で分かち合えるのが市民共同発電所の意義」と大西さん。おひさま発電所には、地域の人も使えるよう、必ず外部コンセントをつける。災害に強いまちづくりもグリーンファンドの目標のひとつだ。大西さんもまた、ウトロの支援活動には長年携わってきた。この夏、電気がなければ命さえ脅かされるほどの酷暑に危機感を覚えたという。「電気を電力会社任せにして、万が一にもウトロの水道のように恣意的にも経済的にも供給されないようなことがあってはならない」と、語気を強めた。

祈念館には、海外や全国から多くの問題意識を持った団体、個人が訪れる。若い世代の人も多い。排外主義の傾向が広がる今、阿部さんは「まずはちゃんと歴史を知ってほしい」と強調する。祈念館のコンセプトは「ウトロに生きる、ウトロで出会う」。展示は2階に集め、1階はキッチンのある広いホールにした。訪れる人はここでボランティアスタッフや住民と出会って話し、時にはご飯も一緒に食べていく。人となりが、勇氣と希望と元氣を持ち帰ってほしいと阿部さん。おひさま発電所も、そのきっかけになる。「エネルギーも人権だと、気づくための入り口が一つ増えました」とほほえむ。